

シネマ日記



No. 66

○月×日 作家・井上靖が晩年に綴ったエッセイ風の自伝小説に『わが母の記』がある。「花の下」「月の光」「雪の面」という短編を三部作としてまとめたもので、死の影が忍び寄る年老いた母の姿を、家族ともに見守りながら生の果てを追求した小説だった。感傷を排した透徹した筆致から、逆に母への限らない哀惜の念が伝わってくる作品だ。その井上靖をモデルに同名のタイトルで映画化されたのが本作だ（原田真人監督）。氏は幼いとき、父母から離れ、曾祖父のお婆さんという人に預けられ育てられた。『しろばんば』という小説で、その頃を子供の目を通して、そのお婆あさ

んから愛情たっぷり育てられたことが語られている。しかし一方で、実母に捨てられたという思いを拭い去ることができない。そんなわだかまりを残して、数十年後、老母の生の果てに直面することになったのだ。母との別離はある「事情」があったのだが、子としては母から、その時の思いを改めて訊いてみたいし、母も子にわかってもらいたい気持ちがある。しかし、認知症が進み、思うようにいかない。それでも母子の間のわだかまりはいっしょか溶けていくのだった。母子になりきった樹木希林と役所広司が見事にその「空気感」を演じている。ただ役所の個性が強すぎて、筆者が抱く井上靖のイメージとはややそぐわない感もしたが、映画は独立した存在で、捉われることもない。今一つの見どころは、昭和40年代の裕福な大家族の付まいが語られていることだ。戦後日本の家族の物語には小津安二郎や山田洋次の作品のように庶民の姿が語られることが多いが、昭和という時代は裕福な人々の

生き生きとした暮らしもあったことを改めて思う。

○月×日 常夏の島・ハワイ。昔も今も憧れの観光地であることに変わりはないが、「ファミリー・ツリー」（アレクサンダー・ペイン監督）の主人公の弁護士（ジョージ・クルーニー）は、「ここ15年、サーフィンもしていないよ」という仕事人間。映画はそんなシーンから始まるのだが、妻がポット事故で生命維持装置だけで生きている状態になってしまった。家庭を顧みなかったツケが回り、娘二人は父親の言うことなんか聞かない。マッコヨでかっこいいクルーニーでなく、ただおるおるするだけの父親姿が面白い。そんなときに妻が浮気していたことを知り、相手は土地を売ろうとしていた不動産屋の成金野郎だ。なにしろ主人公はハワイのカメハメハ大王の末裔、広大な土地を所有している。売るか売るまいか。売れば観光開発で自然が破壊される。彼は娘たちに目を向けると同時に、自然の素晴らしさにも気づいていくという、家族の再生の物語だ。

○月×日 イラン映画「別離」（アスガー・ファルハディ監督）も現代の家族がテーマ、本年度のアカデミー外国語映画賞受賞作だ。裕福な中年の夫婦、中学生の娘、認知症の父親の四人家族。妻は子どもの教育のために外国に出たい。だが、夫は父親を置いていけないとして、離婚の危機にある。娘を連れて別居した妻に、途方に暮れた夫は父の面倒をやらう家政婦を雇う。ところが、ある事件により、家政婦が流産したこと、夫は殺人罪に問われる。裁判でのやり取りを通して明らかになるのは、イスラム教という宗教と現代社会との抜き差しならない葛藤・対立である。別離にはそうした意味もあるのだろう。

○月×日 戦前の朝鮮に浅川巧という林業技師がいた。日韓の不幸な歴史にあつても朝鮮人と親交を結んだ稀有な日本人として、韓国の教科書にも載っている実在の人物だ。「道 白磁の人」（高橋伴明監督）はその博愛に満ちた生涯をたどる感動作だ。（内藤 哲